富木殿御返事

文永一二年二月七日　五四歳

帷(かたびら)一領給(た)び候ひ了(おわ)んぬ。

夫(それ)仏弟子の中に比丘一人は侍(はん)べり。飢饉(ききん)の世に、仏の御時事かけ欠て候ひければ、比丘袈裟(けさ)をう売て其のあたい価を仏に奉る。仏其の由来を問ひ給ひければ、しかじかとありのまゝに申しけり。仏云はく、袈裟はこれ三世の諸仏解脱(げだつ)の法衣なり、このあたひ価をば我ほう報じがたしと辞退しましましししかば、此の比丘申す、さてこの袈裟あたひをばいかんがせんと申しければ、仏の云はく、汝悲母(ひも)有りや不(いな)や。答へて云はく、有り。仏云はく、此の袈裟(けさ)をば汝が母に供養すべし。此の比丘、仏に云はく、仏は此の三界の中第一の特尊なり。一切衆生の眼目にてをはす。設(たと)ひ十方世界を覆(おお)ふ衣なりとも大地にしく袈裟なりとも能く報じ給ふべし。我が母は無智なる事牛のごとし。羊よりもはかなし。いかでか袈裟の信施をほう報ぜんと云云。仏返詰(ほんきつ)して云はく、汝が身をば誰が生みしぞや、汝が母これを生む。此の袈裟の恩報じぬべし等云云。此は又、齢(よわい)九旬(じゅん)にいたれる悲母(ひも)の、愛子にこれをまいらせさせ給ひ、而して我と老眼をしぼり、身命を尽くせり。我子の身として此の帷(かたびら)の恩かたしとをぼしてつかわせ遣るか。日蓮又ほう報じがたし。しかれども又返すべきにあらず。此の帷をきて着日天の御前にして、此の子細を申す上は、定めて釈・梵・諸天しろしめすべし。帷一つなれども十方の諸天此をしり給ふべし。露を大海によせ、土を大地に加ふるがごとし。生々に失(う)せじ、世々にくちざら朽むかし。恐々謹言。

二月七日　　日　蓮　花　押